

黒人競技者の“押出し”要因

—プロ野球選手のケース—

—

アメリカの学生フットボール界の最大のイベントであるローズ・ボウルに太平洋岸十大学競技連盟 (Pacific 10 Conference) を代表して、一九八二年正月ワシントン大学は二年連続の出場を果たした。このような栄冠をかちとるためには実力のみならず幸運も伴わねばならない。しかしなによりも強力なチームづくり・優秀な選手団編成が最も重要となるがそのことのために同時に多くの問題を抱えこむことも事実である。大学の対校スポーツ活動のあり方については、すでに一九二九年カーネギー財団の報告書⁽¹⁾によって問題が指摘された。そしてそれ

川 口 智 久

以来幾多の解決策が提起されてきたとはいえ、新たな困難の噴出によって事態は必ずしも解決の方向に進んでいるとは言えない。むしろ或る面で事態は潜行し深刻化しているといえよう。そのために全米大学競技協会 (National Collegiate Athletic Association) は種々の規約を設定し、大学競技局の活動の規制—新人採用、奨学金支給のあり方などを試みているものの特定競技種目⁽²⁾にあっては基本的に大学競技としての性格を逸脱し商業主義、営利主義と結びつく傾向を強めている。特にフットボール、バスケットボールチームなどは大学名を名乗るアマチュアとはいえ、半ば職業的に位置づけられ、強力チームの育成による高度な試合展開によって観客の大量

動員を果たし多額の利益を大学当局のために生み出しう
る仕組となつて⁽³⁾いる。

また学生競技者の多くにとっては在学中の競技成績が
将来の自己の生活、職業スポーツ生活を決定する要因と
なつてゐることもかかわつて一部には学業を顧みずスポ
ーツ活動に集中するという現象が起つてゐる。同時にこ
のことは野球に遅れて職業スポーツ組織として出発した
フットボールやバスケットボール球団が在学中の選手の
知名度を利用し、また大学対校戦を試験・試用の場とし
て位置づけるなど、大学チームをプロ諸球団の新人養成
機関として機能させてゐることも関係がある。

強力な優秀チームは多額の収益を得ることが出来、そ
の資金の活用は有望新人の発掘、奨学金の提供、有能で
豊富なコーチ陣の配備、豊かな競技施設・用具が再び強
力チームの育成へと連動していく。このように大学チー
ムにあつても営利主義、それと結びつく勝利第一主義が
支配的であり、それに対する執拗な態度はもはや大学対
抗競技関係者の常識とさえなつてゐる。そしてこのため
の最も強力な手段として黒人競技者がこの状況、この体
制の中に組込まれていくのである。他面、黒人青年がス

ポーツに関与することで大学進学、知的訓練の場を保証
されるようになったと指摘される場合もある。このこと
については確かに全面的に否定することは出来ないが、
今日大学競技界が置かれてゐる状況とかかわつて彼らの
スポーツ関与の仕方は決して望ましいものであると言
うことはできない。

ワシントン大学チームにあつても明らかにこのような
黒人競技者による強化現象を見出すことができる。ちな
みに試合出場を中心メンバーである第一団から第三団の
計六八名についてみると白人五九%、非白人(大部分
は黒人アメリカ人)三八%という人種構成となる。全構
成員の三分の一以上が非白人なかんずく黒人アメリカ人
であることは注目し値するがこれを攻守の組織別にみる
とさらにきわだつた特徴があらわれる。攻撃チーム全体
ではほぼ二対一で白人優位になつてゐるが、守備におい
てその差は縮まり三対二となる。そして守備第一団にあ
つては非白人が四対一と圧倒的な数となり逆転した関係
が成立する。勿論このような状況は、ワシントン大学の
みならず大学競技界全般にわたつての傾向である。また
この黒人競技者の突出現象はプロの世界にもみられるも

(57) 黒人競技者の“押し出し”要因

ワシントン大学フットボールチーム人種構成 (1981)

		白人		非白人		不明		計	
総計		人	%	26	38.2	2	2.9	68	100.0
攻撃チーム	第一団	8	66.7	4	33.3			12	100.0
	第二団	7	58.3	5	41.7			12	100.0
	第三団	7	63.6	4	36.4			11	100.0
	計	22	62.9	13	37.1			35	100.0
守備チーム	第一団	2	18.2	9	81.8			11	100.0
	第二団	7	63.6	4	36.4			11	100.0
	第三団	9	81.8	0		2	18.2	11	100.0
	計	18	58.9	13	38.2	2	2.9	33	100.0

University of Washington: Husky Football 1981.
pp. 73-75, Offensive Depth Chart 及び Defensive Depth Chart より作成。

のである。

黒人競技者のスポーツ界への大量進出は先にも述べたように勝利主義、営利主義へのあくなき要求を持つスポーツ

資本の必要性から技術、体力に秀れた能力を持つ青少年の大量動員の結果であるが、スポーツ資本の側の要求のみならず黒人社会・黒人青年の側にも要求と必要がありこの両者の相乗作用によって惹き起されていると言つてよいであろう。

黒人アメリカ人のスポーツ界への大量進出が現実問題として存在している中で、これを阻止しようとする提起がなされていることにも注目しておかねばならない。「黒人社会にとって最もよい選択は大学対抗競技とプロ競技からの大量撤退にあると思われる。これは数世代にわたるかもしれないし、或は黒人社会にとって妥当な水準の生活を達成するのに一定の時間が必要である間なされるべきものかもしれない。組織化されたスポーツは黒人青年にとって殆んど活力を得させない或る種の罠であった。黒人社会は(スポーツ)コーチではなくもつと教師を必要とし、薬物ではなく適当な栄養摂取を必要とし、(野球の)中堅手よりも健康問題についての科学者が必要であり、(試合で)中軸となる人物よりも経済学者や実業家を必要としているのだ。」⁽⁴⁾

これは確かに非現実的で、しかも過激な提案であるが

黒人社会内部においても黒人競技者の異常突出が重要な問題であることを理解させるものである。

二

アメリカスポーツ界とくにボクシングや陸上競技界で黒人競技者が傑出した活躍をはじめてから相当の時間が経過している。しかし彼らの活躍が如何にすぐれたものであったにせよ、それは極めて限られた範囲の、かつ量的にも少数のものであり、白人のスポート支配体制の枠内で展開されていたがゆえに大きな社会問題とはなり得なかつた。

これらとは別に黒人アメリカ人による職業野球組織があった。この黒人野球リーグの設立は「分離するが平等」の考えのもとに黒人野球を切離しておきながら、結果的には球場の彼らへの貸出しなどによって利益を上げると同時に、彼らの野球組織を白人体制下に置き、しかも黒人大衆のスポート要求をも支配していくことを意図したものであった。しかし、一九四七年黒人競技者であるジャッキー・ロビンソン (Jack Roosevelt Robinson) を白人体制の下にある職業野球機構に登場させざるを得

なくなつたことを契機に、他の職業スポート組織においても黒人競技者の利用は急増し、彼らは直接的にアメリカの白人スポート体制に強固に組込まれ、その不可欠な部分を形成するまでにいたつた。

他方、このような黒人競技者の白人体制への組込とかかわつて逆に「統合するが不平等」という現象が進行していることを指摘する研究もある。具体的にはスタッキング (stacking) という言葉で表現される競技ポジションに対する差別と固定化であり、他は競技能力や成績に十分対応しない経済的処遇の差別と不平等化などである。これらの諸問題はアメリカスポートにおける自由と平等、なかならず競技機構内における民主主義及びその基盤である社会的諸関係を検討する上で極めて重要な点であることを否定するものではない。しかし競技界内部、職業スポート機構において生じている差別を問題にする以前に、少数集団である黒人アメリカ人が何故にアメリカスポート界において大量に、しかも不可欠な勢力として活躍しているのか、また彼らがそうせざるを得ない理由について問題が提起されねばならないのである。

現在のように、合衆国における人種構成比を大幅に超

えて黒人競技者が大量に進出してゐることが黒人アメリカ人、或は黒人社会にとって真に望ましいことかどうか問われねばならないのである。結論的に言えば、それは不平常な状態であると考えるべきであらう。つまりこれは黒人アメリカ人に対する社会的・経済的差別、その具体的あらわれとしての失業と貧困を基盤にしてもたらされた現象であり、スポーツ界における競技者の突出となつて現出しているとみなければならぬ。それゆゑ黒人にとつて、スポーツ或はエンタテイメントの世界とのかかわりがゲッターからの脱出、社会上昇への最良にして唯一の手段だと言われてきたとしても、今日の黒人競技者の大量進出という現象は決してアメリカ社会における黒人差別問題の解決になり得ないどころか逆に差別や貧困を生み出す矛盾の本源を隠蔽する作用を果しているといえる。現実には、スポーツ産業・スポーツ資本が黒人競技者の安価でしかも優秀な技量を労働力として利用しているにすぎないのであり、黒人社会をめぐる状況が根底から改善され、白人と真に対等平等の關係が生み出されない限り今後ますます黒人競技者の利用が進行していくと予想されるのである。

また黒人に対する社会的差別とそれによる彼らの貧困化そしてゲッターの存在がスポーツ資本の利潤の源泉であり、基本的には黒人アメリカ人に対する社会的差別の温存、固定化がスポーツ資本にとって必要なこととなる。それゆゑ現在の状況、形態における黒人アメリカ人のスポーツ体制への統合は問題の解決、差別の解消どころかそれを阻止し或は遲滞させる作用さえ果しかねない重大な問題である。

黒人競技者の突出現象は二つの必要・要求の相乗作用によるものであることを述べたが一つは「引込み要因」といえるスポーツ界つまりスポーツ資本の側の必要・要求であり、もう一つは黒人社会の「押し出し要因」である。現実社会における黒人アメリカ人、特に黒人青少年に対する社会的差別は彼らに対して生きる手だてを正当に保障するどころか奪いとり当然のごとく貧困化を促進する。それゆゑ多数の黒人青少年が実現の可能性極めて薄いしかも不安定な職業であることを承知しながらも職業競技者への道を志向せざるを得なくさせられている理由はここにある。結局、差別を基本に据えたアメリカ社会が、差別を払拭しきれずにいるというよりむしろそれを積極

的に利用し、スポーツ界に黒人青少年が否応なく押し出される条件をつくり出しているのである。

デューク大学のビル・マレイ (Bill Murray) の研究⁽⁵⁾によれば、高校を卒業する前にプロ球団と契約した九〇〇人の若者のうちおよそ二〇人が大リーガーとなり、僅か五人が年金を受けとる資格ができる五年間プロに在籍しえたにすぎないとされる。また次のような発言もある。

「三〇歳代の半ばにこれら才能ある人たちは名声が頂点に達した。そして彼らは十年ほど光り輝き、やがてその他の仕事を見つけることが必要となった⁽⁶⁾」。これはミッチェナーがプロ競技者として成功を収めることが出来た何人かの人たちについて自らの文筆活動との対比で述べたものである。このことからわかるようにプロ競技者は例え第一線で活躍することが可能となった場合でも不測の怪我、突然のスランプ、そして有望新人の台頭などによってそのポストを失うこともあるし、また自身の生理的・心理的状态の長期的維持は困難であり、結局競技者生活は短かくしかも十分に保障されたものではなく不安定な職場であると言える。

しかしそれでもなお職業競技者は生み出される。それ

は黒人競技者が一九世紀末から二〇世紀中葉にかけてのボストンの拳闘家と同じように野球やバスケットボール、フットボールをやりたいがゆえにスポーツ選手になつたのではなく、むしろそれ以外に彼らの困難な現実から這い上る道がなかったからであると考えるべきであろう⁽⁷⁾。

三

差別と貧困が黒人職業競技者の輩出原因であることを明らかにするため野球をその対象とした。アメリカの職業野球の機構はそれぞれ技術的レベルに応じて分化され、その頂点にメジャーリーグが位置づいている。そして、より下位の組織はメジャーリーグのクラブとの間に一定の関係をもち、或は資本の系列下におかれ上位のそのための選手養成機関としての役割を果している。この野球はアメリカのナショナル・ゲームとしての性格をもち、しかも最も早い時期に組織化され企業化されたものであり、アメリカを代表するスポーツの一つであると指摘してよい。しかしこの職業野球機構は徒弟制度にも似たものであり、その中であつて確固たる位置を占めかつそれを長く保持することは容易なことではない。またここに

(61) 黒人競技者の“押し”要因

	アメリカ人	外国人	計
白人	455 61.7%	13 1.8	468 63.5
非白人	140 19.0	56 7.6	196 26.6
不明	65 8.8	8 1.1	73 9.9
計	660 89.5	77 10.5	737 100.0

	白人	非白人	不明	計
ドミニカ	2	19	2	23 29.9
プエルトリコ	3	14	2	19 24.7
メキシコ	2	7	2	11 14.3
ベネズエラ	0	6	1	7 9.1
バハマ	0	5	1	6 7.8
カナダ	5	1	0	6 7.8
キューバ	1	4	0	5 6.5
計	13 16.9%	56 72.7	8 10.4	77 100.1

登場することの出来ない極めて多数の競技者がこの組織を支えていることも十分に承知しておかねばならない。ここでは一九八〇年シーズンにメジャーリーグのいず

れかのクラブに在籍した者について、人種構成を中心に分析を試み、黒人競技者のもつ特殊性を指摘しようとするものである。⁽⁸⁾なお競技者のうち、シーズン途中で下位リーグに移動させられた者は除き、シーズン終了時に在籍した者を分析の対象とした。

対象とした競技者のうち六六〇名八九・五%がアメリカ人であり、白人は六一・七%、非白人は一九%であった。また全選手に占める非白人は二六・六%と四分の一を超える。これは外国選手のうち約七三%が非白人であるという状況からもたらされたものである。アメリカ人、外国人とも非白人の大部分は黒人であり、彼らの野球界への進出が如何に目ざましいかが理解できる。また白人によって創られ、彼らによって発展させられてきた野球がアメリカ職業野球に限ってみれば今日黒人競技者によって支えられていると言ってよい。

この大リーグを支えている約半数は二八歳以下の若者たちであり、七〇%が三〇歳未満である。また人種間の平均年齢を比較すると二八・三歳及び二八・八歳と僅かではあるが非白人競技者が高くなっている。また非白人は二五歳から二七歳の者が三分の一を占め、二九歳から

メジャーリーグ野球選手年齢構成

(1980)

年齢	アメリカ人						外国人		計	
	白人	%	非白人		不明					
20	0		0		0		2	2.6	2	0.3
21	6	1.3	2	1.4	3	4.6	2	2.6	13	1.8
22	11	2.4	1	0.7	7	10.8	2	2.6	21	2.9
23	18	4.0	7	5.0	9	13.9	9	11.7	43	5.8
24	40	8.8	7	5.0	13	20.0	9	11.7	69	9.4
25	38	8.4	15	10.7	11	16.9	3	3.9	67	9.1
26	58	12.7	15	10.7	13	20.0	3	3.9	89	12.1
27	42	9.2	17	12.1	3	4.6	12	15.6	74	10.0
28	40	8.8	8	5.7	5	7.7	3	3.9	56	7.6
29	43	9.5	13	9.3	0		4	5.2	60	8.1
30	36	7.9	13	9.3	1	1.5	10	13.0	60	8.1
31	23	5.1	13	9.3	0		2	2.6	38	5.2
32	27	5.9	6	4.3	0		8	10.4	41	5.6
33	20	4.4	6	4.3	0		2	2.6	28	3.8
34	16	3.5	6	4.3	0		0		22	3.0
35	10	2.2	1	0.7	0		1	1.3	12	1.6
36	13	2.9	4	2.9	0		1	1.3	18	2.4
37	5	1.1	3	2.1	0		1	1.3	9	1.2
38	2	0.4	2	1.4	0		2	2.6	6	0.8
39	1	0.2	1	0.7	0		0		2	0.3
40	1	0.2	0		0		1	1.3	2	0.3
41	2	0.4	0		0		0		2	0.3
42	2	0.4	0		0		0		2	0.3
不明	1	0.2	0		0		0		1	0.1
計	455	99.9	140	99.9	65	100.0	77	100.1	737	100.1
平均年齢	28.3		28.6		24.6		27.7		28.0	

三二歳が二八%と第二の山を形成している。この両方の鋭い谷間にある一九五二年生れの選手は外国人の場合も

数是非白人が白人より〇・七年長い。平均年齢及びプロ在籍年数からみて白人の入団契約年齢は一八・九歳、非

少なく、今後検討の必要があらう。つまり彼らの入団契約時と思われる一九七〇年における経済状況、戦争の影響などが十分に考慮されねばならないであらう。一九七〇年における非白人の入団者は、球界の中堅をなすべきそれぞれの階層が五%以上ほぼ七―九%を占めている時四%台であることに注目しておく必要がある。入団年次から算出した平均競技経験年

(63) 黒人競技者の“押し”要因

入団年 年数		プロ野球在籍年数						外国人		計	
		アメリカ人									
		白人		非白人		不明					
80	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
79	2	4	0.9	0	3	4.6	1	1.3	8	1.1	
78	3	13	2.9	2	1.4	6	9.2	1	1.3	22	3.0
77	4	23	5.1	7	5.0	17	26.2	1	1.3	48	6.5
76	5	46	10.1	9	6.4	17	26.2	7	9.1	79	10.7
75	6	43	9.5	14	10.0	7	10.8	7	9.1	71	9.6
74	7	48	10.5	8	5.7	7	10.8	7	9.1	70	9.5
73	8	37	8.1	16	11.4	4	6.2	5	6.5	62	8.4
72	9	41	9.0	14	10.0	2	3.1	4	5.2	61	8.3
71	10	32	7.0	12	8.6	1	1.5	9	11.7	54	7.3
70	11	41	9.0	6	4.3	1	1.5	7	9.1	55	7.5
69	12	25	5.5	14	10.0	0		4	5.2	43	5.8
68	13	28	6.2	12	8.6	0		8	10.4	48	6.5
67	14	19	4.2	6	4.3	0		4	5.2	29	3.9
66	15	16	3.5	4	2.9	0		4	5.2	24	3.3
65	16	17	3.7	6	4.3	0		3	3.9	26	3.5
64	17	7	1.5	1	0.7	0		1	1.3	9	1.2
63	18	4	0.9	4	2.9	0		0		8	1.1
62	19	4	0.9	2	1.4	0		2	2.6	8	1.1
61	20	2	0.4	2	1.4	0		0		4	0.5
60	21	1	0.2	0		0		1	1.3	2	0.3
59	22	2	0.4	1	0.7	0		1	1.3	4	0.5
58	23	1	0.2	0		0		0		1	0.1
57	24	1	0.2	0		0		0		1	0.1
計		455	99.9	140	100.0	65	100.1	77	100.1	737	99.8
平均在籍年		9.4		10.1		5.2		10.3		9.2	

白人の場合は一八・五歳と予測できる。入団年齢の差は僅か〇・四歳にすぎない。しかし後期中等教育の年限やそれを十分に受けることを可能にする経済的状態とかかわって見るとき非常に大きな意味を持つといわねばならない。すなわち非白人の場合、アメリカ黒人社会の貧困性が高校教育さえも十分に受けさせる能力を持ち得ず、子弟を早期に野球界に送り出していることを物語るものである。

次に大リーグにおける経験在籍年をみると

メジャーリーグ在籍年数

(1980)

在籍年	アメリカ人						外国人		計	
	白人		非白人		不明					
1	34	7.5%	10	7.1	33	50.8	12	15.6	89	12.1
2	50	11.0	8	5.7	19	29.2	6	7.8	83	11.3
3	50	11.0	12	8.6	6	9.2	5	6.5	73	9.9
4	48	10.5	20	14.3	4	6.2	9	11.7	81	11.0
5	42	9.2	6	4.3	1	1.5	8	10.4	57	7.7
6	36	7.9	12	8.6	0		3	3.9	51	6.9
7	39	8.6	14	10.0	0		9	11.7	64	8.7
8	33	7.3	13	9.3	0		5	6.5	51	6.9
9	21	4.6	10	7.1	0		4	5.2	35	4.8
10	20	4.4	7	5.0	0		2	2.6	29	3.9
11	24	5.3	4	2.9	0		3	3.9	31	4.2
12	16	3.5	7	5.0	0		4	5.2	27	3.7
13	11	2.4	7	5.0	0		1	1.3	19	2.6
14	13	2.9	2	1.4	0		2	2.6	17	2.3
15	7	1.5	3	2.1	0		0		10	1.4
16	4	0.9	2	1.4	0		1	1.3	7	1.0
17	2	0.4	0		0		3	3.9	5	0.7
18	2	0.4	2	1.4	0		0		4	0.5
19	1	0.2	1	0.7	0		0		2	0.3
20	1	0.2	0		0		0		1	0.1
21	0		0		0		0		0	
22	1	0.2	0		0		0		1	0.1
計	455	99.9	140	99.9	65	100.0	77	100.1	737	100.1
平均年数	6.4		7.0		1.9		6.2		6.1	

白人は二年次、三年次がともに大きな比率を占めている。これに対し非白人は対照的に二年次に落込みを記録して

と西部が三一%と多く、続いで北部中央、南部となる。北東部は一五%と比較的少ない。これらを白人、非白人

いる。このことを考えるために大リーグへの過程を見ると、白人、非白人とも過去に一度大リーグに登場しながら一旦下位リーグに転落し再浮上してくるといいう例が圧倒的に多い。ただ初めて大リーグに登場する者の割合はほぼ白人、非白人とも同じであるが、二度目の登場の機会は白人の半分しか与えられていないといいうのが実情である。

アメリカ人競技者のうち白人四五五名(うち五名は出生地が外地であり除外した)非白人一四〇名についてその出生を地域別にみる

(65) 黒人競技者の“押し”要因

		野球選手出生地区 (1980年)					
		白人		非白人		計	
北東部	中部大西洋岸	53 ^人	11.8 [%]	13	9.3	66	11.2
	ニューイングランド	20	4.4	2	1.4	22	3.7
	計	73	16.2	15	10.7	88	14.9
北中央部	西北中央	35	7.9	8	5.7	43	7.3
	東北中央	103	22.9	16	11.4	119	20.2
	計	138	30.7	24	17.1	162	27.5
南部	西南中央	38	8.4	23	16.4	61	10.3
	東南中央	18	4.0	17	12.1	35	5.9
	南大西洋岸	44	9.8	19	13.6	63	10.7
	計	100	22.2	59	42.1	159	27.0
西部	太平洋岸	128	28.4	38	27.1	166	28.1
	山岳部	11	2.4	4	2.9	15	2.5
	計	139	30.9	42	30.0	181	30.7
総計	450*	100.0	140	100.0	590	100.1	

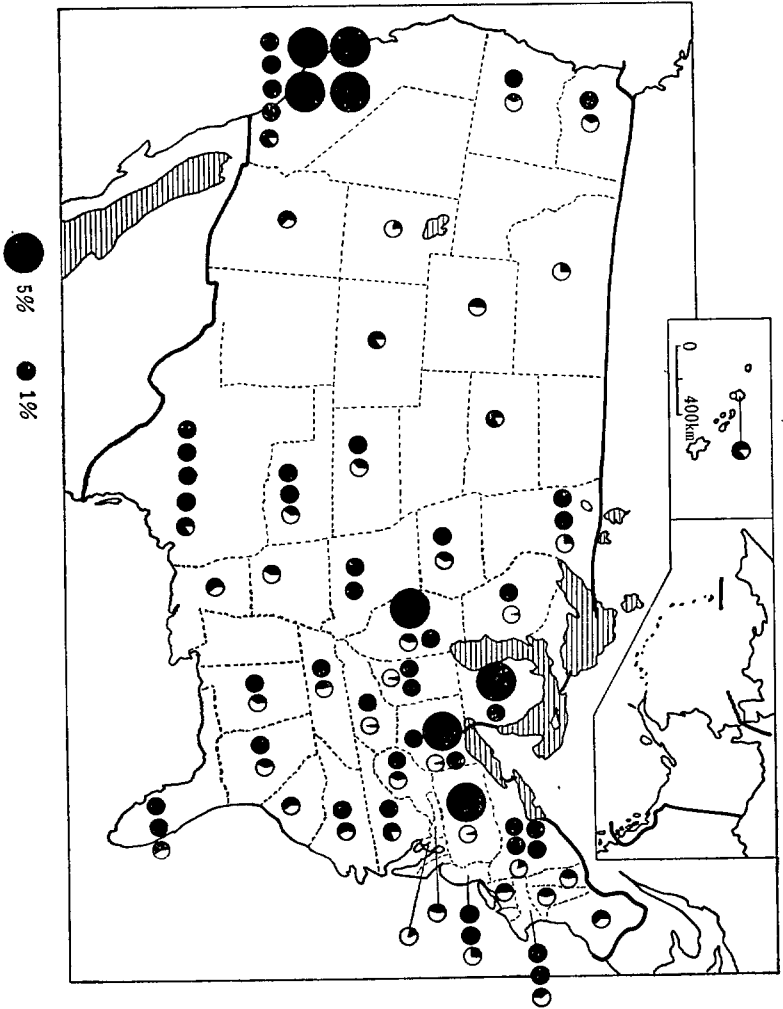
*外国生れの5名は含まれていない。

選手輩出と人口比

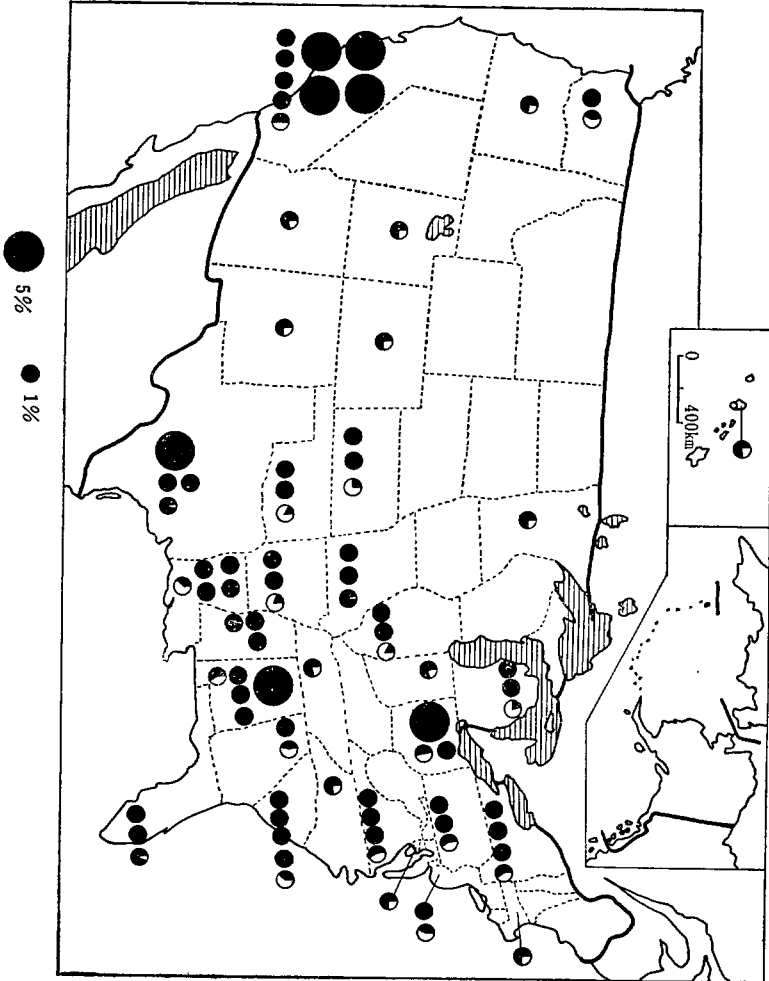
	1970年男女人口		選手率/人口率	
	白人	非白人	白人	非白人
北東部	44,311 ^{千人}	4,730 ^{千人}	16.2/24.9	10.7/18.6
	24.9%	18.6	0.65	0.58
北部中央	51,641	4,931	30.7/29.1	17.1/19.4
	29.1	19.4	1.1	0.88
南部	50,420	12,375	22.2/28.4	42.1/48.6
	28.4	48.6	0.78	0.87
西部	31,377	3,427	30.9/17.7	30.0/13.5
	17.7	13.5	1.75	2.22
計	177,749	25,463	76.3/87.5	23.7/12.5
	100.1(87.5)	100.1(12.5)	0.87	1.90

別にみると非常に明確な差異が明らかになる。すなわち白人の場合は西部及び北中央部で、そして非白人は南部と西部から輩出されている。しかしこの数値を対人口との関連でみれば地域的特質がなお一層明らかになる。これによれば北東部の選手・人口比は白人が〇・六五、非

白人が〇・五八となり青少年層の中に十分選手を生み出す状況が作り出されているとは言えない。また北中央部において白人は僅かではあるがその比率を越えているが非白人は下まわっている。南部出生の非白人選手は四二%と突出しているように見えるが、この地域には合衆



(67) 黒人競技者の“押し出し”要因



国における非白人人口の四九%が生活しているのであり、それとの対応において考えるとき選手・人口比が○・九であることから決して決して異常なものではないと指摘できるとして西部の場合には白人、非白人ともに選手・人口比は一・七五及び二・二二という高く、かつ圧倒的な数値を示している。

州別・非白人選手対人口比

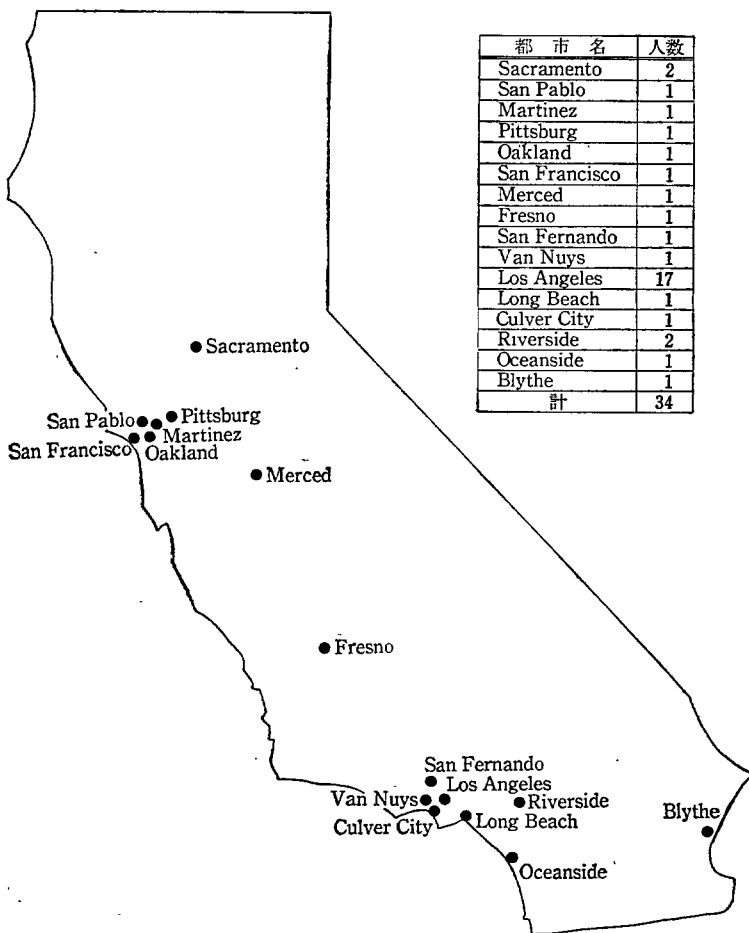
	黒人人口 (1970年)		競 技 者 数	競 ／ 人 比		黒人人口 (1970年)		競 技 者 数	競 ／ 人 比
	5~24歳					5~24歳			
U. S.	9,795千人	140人	100%		U. S.	9,795千人	140人	100%	
Ala	402	12		2.1	Mo	206	4		1.4
	4.1	8.6				2.1	2.9		
Ark	156	3		1.3	N.Y	864	5		0.4
	1.6	2.1				8.8	3.6		
Cal	600	34		4.0	Ohio	410	9		1.5
	6.1	24.3				4.2	6.4		
Fla	460	4		0.6	Okla	76	3		2.8
	4.7	2.9				0.8	2.1		
Ill	617	3		0.3	Pa	412	5		0.9
	6.3	2.1				4.2	3.6		
Kans	48	3		4.2	S.C	373	6		1.1
	0.5	2.1				3.8	4.3		
La	493	6		0.9	Texas	605	11		1.3
	5.0	4.3				6.2	7.9		
Mich	424	3		0.5	Va	373	5		0.9
	4.3	2.1				3.8	3.6		
Miss	378	4		0.7					
	3.9	2.9							

Statistical Abstract of the United States, 1978 No. 37 から算出。

これを州別にみるとカリフォルニアが白人、非白人ともに高く両者ともほぼ二五%を占めている。しかし他地域においては明らかに特徴がみられる。すなわち白人にあっては、オハイオ、イリノイ、ミシガンそしてペンシルベニアと比較的北部寄りであり五大湖周辺に位置していることがわかる。これに対して非白人の場合にはアラバマ、ルイジアナ、サウス・カロライナそしてテキサスと南部諸州の出生者が多いと指摘できる。ただオハイオ州が南部の域を越えて白人

(69) 黒人競技者の“押し”要因

非白人出生地 (1980年メジャーリーグ在籍者)



白人出生地分布 (1980年メジャーリーグ在籍者)



選手とともに或る程度の選手を生み出していることに注目しておこう。

他方それぞれの州における非白人の競技適齢人口と競技者数との比較（適齢人口率と競技者輩出率⁹）を行なうと、ここでもカリフォルニアが四・〇、アラバマ二・一を示している。ルイジアナ、サウス・カロライナ、テキサスなどは人口に見合ったほぼ適正な数値とみることが出来る。ただ巨大な黒人アメリカ人の人口を持つニューヨークが僅かに〇・四の比率であることは都市の持つ機能とそこにおける他の競技種目との関係があるものと思われる。

白人・非白人競技者のそれぞれ約二五％を輩出しているカリフォルニアでの出生地についてみると次のような特徴が指摘できる。白人の場合、ロサンゼルス、ロングビーチ市出生者は一五％程度であるがその周辺地区を含めるとほぼ五〇％となる。他は全州的に分散している。つまり特定都市への集中が比較的少ないと言える。これに対し非白人の場合は顕著な傾向がみられる。それはまずロサンゼルスが五〇％、そして周辺都市を含めれば七一％にもなる。またサンフランシスコ、オークランド地

区では一五％弱に留まっている。このように白人がロサンゼルスを中心としながらも比較的州全体にわたって輩出されていることを考えると、現在非白人集団とくに黒人アメリカ人が都市中心部に集中し生活していることを如実に反映したものであり、都市における黒人の差別と貧困にもとづく生活実態と大きなかかわりをもって職業競技者が生み出されてきていると予想されるのである。

四

すでにみたようにカリフォルニア出生の非白人競技者は、州の南部しかも圧倒的にロサンゼルス及びその周辺地区から輩出されていることが明らかになった。それでは何故この地区が選手輩出の水源地たりうるかを分析する必要がある。それはなによりも黒人人口の西部への流入とそれに伴う貧困化現象の増大にあるとみななければならない。しかし現状においてアメリカのスポーツ資本は黒人アメリカ人の貧困を基盤にしつつ彼らを労働力の中心として注目しているのである。それゆえ彼らの生活実態を把握することが、職業競技者への契機を見極めるために極めて重要となる。しかしここでは黒人社会の一般

地域別平準家庭所得

年代	地域 人種	U. S	South	North & West			
				Total	N. E	N. C	W
1964	黒人	\$ 5,921	4,597	8,010	7,877	8,023	9,199
	白人	\$ 10,903	1	11,512	11,795	11,129	11,777
	黒/白	0.54	0.49	0.70	1.26	1.19	1.26
1969	黒人	8,074	6,708	9,969	9,269	10,393	10,334
	白人	13,175	11,789	13,747	13,808	13,713	13,717
	黒/白	0.61	0.57	0.73	1.17	1.16	1.16
1974	黒人	7,808	6,730	9,260	8,788	9,846	8,585
	白人	13,356	12,050	13,905	14,164	14,017	13,339
	黒/白	0.58	0.56	0.67	1.17	1.16	1.16

出典: The Social and Economic Status of the Black Population in the United States: An Historical View, 1790—1978, Table 19, p. 36 より。

的傾向を概観することにとどめたい。
 一般に黒人アメリカ人はアメリカ社会にあって差別され、貧困状態にあるとされる。この状態がいかなるも

同程度の収入を得て一見裕福に見えたが、年とともに白人との差は拡大する方向にある。つまり西部の黒人は自
 からの収入減と南部黒人の収入増との関係の中でその様

のであるか収入の状況からみよう。
 一九六七年から一九七四年における黒人家庭の収入は白人のそれに對してほぼ六〇％にとどまっている。これを地域ごとと比較すると、どの年度にあっても南部黒人が常に低い位置におかれている。しかし南部の黒人収入は次第に上昇の傾向を示しているものの相変わらず白人収入の六〇％を出ることはない状況である。これに対して西部の黒人収入は南部黒人に比し一九六四年にはほぼ二倍であったが一九七四年には一・三倍程度におし下げられた。このように南部黒人との較差は次第に小さくなってきており、かつて南部の白人とほぼ

(73) 黒人競技者の“押出し”要因

黒人人口の年代別分布

年	人 数			百 分 比		
	1960	1970	1975	1960	1970	1975
U. S.	18,872 ^(千)	22,589	24,435	100%	100	100
No. E	3,028	4,346	4,736	16.0	19.2	19.4
N.Y	1,418	2,170	2,382	7.5	9.6	9.7
N.J	515	771	871	2.7	3.4	3.6
Pa	853	1,071	1,049	4.5	4.7	4.3
No. Cen	3,446	4,570	4,926	18.3	20.2	20.2
Ohio	786	974	1,034	4.2	4.3	4.2
Ind	269	358	389	1.4	1.6	1.6
Ill	1,038	1,420	1,534	5.5	6.3	6.3
Mich	718	992	1,080	3.8	4.4	4.4
Minn	22	35	40	0.1	0.2	0.2
South	11,312	11,973	12,815	59.9	53.0	52.4
Va	816	862	931	4.3	3.8	3.8
S.C	829	789	867	4.4	3.5	3.5
Fla	880	1,042	1,179	4.7	4.6	4.8
Ala	980	904	920	5.2	4.0	3.8
La	1,039	1,087	1,134	5.5	4.8	4.6
Okla	153	171	191	0.8	0.8	0.8
Texas	1,187	1,401	1,530	6.3	6.2	6.3
West	1,085	1,699	1,959	5.7	7.5	8.0
Calif	884	1,404	1,601	4.7	6.2	6.6

出典: Statistical Abstract of the United States, 1978 p. 33, Table 35 より算出。

相を変化させ次第に生活のレベルを低下させてきていると思える。このような一般的な収入の低下、そして低収入地域への転化はどのような原因によるものであるうか。まず西部への黒人人口の流入を一つの手がかりとすることができよう。例えば一九六〇年の合衆国全体の黒人人口に対する各州人口をみるとアラバマが約五・二%、カリフォルニア四・七%、テキサス六・三%であった。しかし一九七〇年にその位置は変化しアラバマ四・〇%、カリフォルニア、テキサスともに六・二%そして一九七五年にはカリフォルニアは六・六%と大きく増加した。これに対しアラバマはさらに減少が進んだのである。これをカリフォルニアについてだけみると一九六〇年から

州別貧困者数と比率 Statistical Abstract of the United States, 1978 p. 470, No. 762 より

州名	個人			世帯		
	1959	1969	1975	1959	1969	1975
U. S	38,682 (千人) 100	27,125 (千人) 100	23,991 (千人) 100	8,315 100	5,462 100	5,051 100
No. E	6,249 16.2	4,821 17.8	4,336 18.1	1,359 16.3	936 17.1	921 18.2
N.Y	2,319 6.0	1,986 7.3	1,671 7.0	497 6.0	391 7.2	357 7.1
N.J	673 1.7	574 2.1	586 2.4	150 1.8	113 2.1	133 2.6
P.a	1,881 4.9	1,228 4.5	1,133 4.7	414 5.0	237 4.3	227 4.5
No. Cen	8,953 23.2	5,952 21.9	5,336 22.2	1,973 23.7	1,171 21.4	1,109 22.0
Ohio	1,508 3.9	1,041 3.8	997 4.2	325 3.9	205 3.8	208 4.1
Ind	797 2.1	493 1.8	424 1.8	176 2.1	98 1.8	85 1.7
Ill	1,446 3.7	1,112 4.1	1,150 4.8	316 3.8	214 3.9	238 4.7
Michi	1,216 3.1	819 3.0	821 3.4	258 3.1	160 2.9	183 3.6
Minn	646 1.7	398 1.5	324 1.4	140 1.7	76 1.4	63 1.3
South	19,104 49.4	12,388 45.7	10,406 43.4	4,072 49.0	2,581 47.3	2,202 43.6
Va	1,164 3.0	691 2.6	513 2.1	245 3.0	143 2.6	110 2.2
S. C	1,049 2.7	595 2.2	478 2.0	206 2.5	119 2.2	94 1.9
Fla	1,371 3.5	1,088 4.0	1,225 5.1	309 3.7	229 4.2	259 5.1
Ala	1,374 3.6	857 3.2	587 2.5	292 3.5	181 3.3	125 2.5
La	1,274 3.3	933 3.4	720 3.0	262 3.2	188 3.4	141 2.8
Okla	680 1.8	465 1.7	370 1.5	160 1.9	102 1.9	83 1.6
Tex	2,970 7.7	2,047 7.6	1,870 7.8	631 7.6	413 7.6	381 7.5
West	4,376 11.3	3,965 14.6	3,912 16.3	913 11.0	774 14.2	818 16.2
Cal	2,199 5.7	2,153 7.9	2,192 9.1	461 5.5	421 7.7	472 9.3

七〇年の十年間に五二万人約五九%の増大をみた。また続く五年間には一九万七千人、一四%増となり、六〇年から一五〇年間で結局七万七千人、八一%の増という驚異的な伸びを記録したのである。西部を除く各地域がほぼ横這いか低落の傾向を示している中で西部

特にカリフォルニアが増加をしたのである。ここでの大リーガーの入団者が七一年から七三年にかけて約五〇％弱であることからみて明らかに人口流入の波と重なり、その影響のあらわれとみてよいであろう。

このような急激な人口流入が西部における収入の低下を導き出した一つの要因であろう。カリフォルニアにあってはこの人口流入・増大にもなつて貧困層も飛躍的に増加していることが明らかになる。南部の各州にあっては五九年から七五年にかけて個人、世帯とも貧困層の割合に大きな変化はないし、むしろ減少の傾向にあるとみることもできる。これに反し、カリフォルニアでは貧困層が増大しているのである。統計にあらわれた平均的な収入はたしかに南部より上位にあることを示してはいるが、貧困層の増大という事実は黒人社会内部における収入格差がより大きなものになっていと思われる。そしてこの黒人社会内部における貧困層が職業競技者への道を歩まざるを得なくなっている一つの要因、つまり押出し要因とみてよいであろう。

小論では黒人社会の経済問題を分析することが本旨ではない。問題は人口比を上まわつて非白人とりわけ黒人

アメリカ人がスポーツ界に押し出されている状況を明らかにし、その背景と問題性を解明することにある。

黒人青少年の生活とかかわつて「最大の被害者は十代の黒人青年であつて、中心城市に住む黒人青年の場合など三人に一人が失業状態におかれて⁽¹⁰⁾いる」と指摘されている。また、「失業の程度を地域的にみると、……黒人人口の分布と正確に対応し、大都市圏はそれ以外のどこよりも高く、大都市圏内部においては中心城市が郊外よりも高くなる傾向がある⁽¹¹⁾」ともされる。まさにこの状況がロサンゼルス或はその周辺都市部に適用できるのであり、そのことと関連をもつて職業競技者の輩出問題を理解しうるのである。

一九四七年のJ・ロビンソンによるカラ・ラインの突破は、アメリカスポーツ資本にとつても大きな利益をもたらすと同時に黒人アメリカ人にも大きな夢と希望をして自信を与えることが出来た。また黒人アメリカ人の白人スポーツ体制へのインテグレーションはスポーツ界全体にも多大な貢献をしたことも事実である。しかしスポーツ資本の黒人利用の先行と黒人社会自体のこれに対する過重な期待は今日のごとき黒人アメリカ人の大量の進

出となつてあらわれたのである。黒人アメリカ人が自らの必要や要求に従い、自らの能力を活かす場としてスポーツ活動の追求を行なうことは決して否定されるべきことではない。しかし社会的諸条件の整備が十分になされず現状におけるごとく社会的差別が放置され或は解決の努力が遅滞している状況の中にあつてはスポーツ界での活躍も全面的に喜べないのである。

職業野球にかかわる極めて部分的な分析を通して黒人競技者にかかわる問題提起を試みたが、他の競技種目、他の要因等を分析する中で黒人アメリカ人のスポーツ活動が真に統合され、定着する方向を模索したい。

- (1) Savage, Howard J. *American College Athletics*. Bulletin Number Twenty-Three, The Carnegie Foundation for the Advancement of Teaching, 1929.
- (2) この点に関してはNCAAこそが大学競技の商業化を推進している張本人であるとする批判もある。
Scott, Jack. *The Athletic Revolution*, The Free Press, 1971 pp. 50—51.
- (3) 一九八二年七月—八三年六年度のアイオワ州立大学体育局予算案は、全営業収益五、九三六、一三七ドル、全営業費用五、四二三、〇六七ドル、営業利益計五、一三、〇七〇

ドル、営業外費用計五〇六、五〇〇ドル、見積り利益六、五七〇ドルとなっている。

- (4) Michener, James A. *Sports in America*, Random House 1976, p. 156.

また有名なプロ・テニスプレイヤーであるアーサー・ブッシュはニューヨーク・タイムスに公開書簡を発表し、黒人の真の解放のためにもっと専門的技術や知識を身につけるべきであり、スポーツに熱中することは決して望ましくないことはならぬと訴えた。Ashe, Arthur "An Open Letter to Black Parents: Send Your Children to the Libraries". *New York Times* (Feb. 6, 1977).

- (5) Mitchener, op. cit., p. 228.
- (6) *ibid.*, p. 225.
- (7) Riess, Steven A., "Sport and the American Dream". *Journal of Social History*, Vol. 14, No. 2 (winter 1980) p. 295.
- (8) 本報では選手¹³ 1981 who's who in BASEBALL, Who's who in Baseball Corporation を用いて選別した。
- (9) プロ球団在籍平均年限を十年とし、中堅選手の入団時に相当する時期の人口を競技者適齢人口とした。
- (10) 大塚秀之『アメリカ合衆国史と人種差別』大月書店、一九八二年、一〇五頁。
- (11) 前掲書、一二三頁。
- (12) ブルックリン・ドジャーズは一九四七年J・ロビンソン

(77) 黒人競技者の“押出し”要因

ブルックリン・ドジャース・観客動員

1946年				1947年	
		遠征試合	本拠地試合	遠征試合	本拠地試合
4月	観客	130,529/⑦	141,982/⑤	91,091/②	174,541/⑨
	平均	18,647.0	28,396.4	45,545.5	19,393.4
	計	272,511/⑩		265,632/⑪	
	平均	22,709.3 (人)		24,148.4	
5月		141,006/⑩	336,312/⑮	421,318/⑱	165,522/⑧
	平均	14,100.5	22,420.8	23,406.6	20,690.3
	計	477,318/⑮		586,840/⑳	
	平均	19,092.7		22,570.8	
6月		278,644/⑰	3,824,992/⑰	372,171/⑰	282,805/⑫
	平均	21,434.2	23,906.2	21,892.4	23,567.1
	計	661,143/㉑		654,976/㉑	
	平均	22,798.0		22,585.4	
7月		410,866/⑲	283,912/⑪	289,376/⑫	503,508/㉒
	平均	21,624.5	25,810.2	24,114.7	22,886.7
	計	694,778/㉓		792,884/㉓	
	平均	23,159.3		23,320.1	
8月		452,878/⑲	261,075/⑩	286,393/⑪	575,692/㉑
	平均	23,835.7	26,107.5	26,035.7	27,413.9
	計	713,953/㉑		862,085/㉑	
	平均	24,619.1		26,940.2	
9月		177,929/⑨	477,059/㉑	458,340/⑱	170,642/⑥
	平均	19,769.9	22,717.1	25,463.3	28,440.3
	計	654,988/㉓		628,982/㉓	
	平均	21,832.9		26,207.6	

益を得たものと思われ。の加入によって、新たな観客動員を可能にし、相当の利

(一橋大学教授)